

主語と述語を土台とする統語解析について

小 川 明

0. この小論では、英語と日本語の統語解析を試みてみたい。基本方針は体験的・実感的にということである。統語解析に関しては、様々な提案がなされているが、ここでは自分で試してみてそこで実際に感じることを出発点にしてみたい。

1. 小川(2004)では、日本語を母語とする学習者が英語を読む時、出会う躓きについて論じた。その一つは、動詞の重要性である。英語を教えていくと、単語の意味を知らないで躓くことも多いのであるが、文の構造がわからず立ち往生することも多い。いくつか具体例をあげてみよう。

- (1) a. A house in an urban area is easy to locate in America, because it is numbered and the street it is on has a name.
- b. That tough brave little old fellow Wells had had prophetic visions after all.
- c. The main difficulties which are posed concern the rendition of culturally specific German or French terms into English.
- d. What people actually do in relation to groups they dislike is not always directly related to what they think or feel about them.

なぜわからないのか。取りあえず実践的には、どうしたらよいのだろうか。私自身は宮下(1982)の説を参考にして次のように学生に問う。動詞がどれか探しなさい。動詞を見つけるのには、三単現の-s、過去を示す-ed、助動詞が手がかりになると述べる。多分学生は漠然と文を眺めていて、どこに注

目すべきか意識していない。動詞がポイントであるという意識はない上に、英語の動詞は見つけにくい。次にその動詞の主語を見つけなさい。主語は英語では機械的に動詞の前にあります。主語と動詞が複数あったらそのうちのひとつが主節のものです。それはどれですか。このようにしていくと、ほぼその文の構造を理解してもらうことができるように思われる。

宮下は英語学習で学生が躓づく点を4つあげている。そのうちの1つが私自身が参考にしたことである。彼の原文を引用する。

英語の文は大抵は主語と述語とから成つてをり、高校以上の読本に出る文の多くは主節と従属節とが立体的に組合はされて、主語と述語との組合せは三つも四つも現れます。そこで学生の最初の関門は第一に主語と述語の組合せを見付けることで、第二に数組の組合せの中から文全体の中心となる(主節の)主語と述語とを選び出すことです。英語では述語は助動詞又は主語に応じて屈折をした定動詞又は過去を表す動詞です。主語と述語とを見付けるには、先ず助動詞か定動詞(一・二人称及び複数の主語に対応した原形動詞、及び三人称単数の主語に対応した-s付きの動詞)又は過去を表す動詞(過去時制の屈折、大抵は-ed付きの動詞)を探して、次にその前にある意味の上で中心となる名詞又は代名詞を探せばよいのです。これらは語の形式に着目して形の上から見当を付けるしかなく、辞書を引いても辞書は何も教へてくれません。次には文全体の主語を決めねばなりません。これは原則として文の先頭に来るのですが、これも中学段階の単純な文ならばまごつかなくても、高校段階以上の複雑な文になると、文の先頭にあってもif や whenなどに率ゐられた従属節の主語もありますから、これと文全体の主語とを区別せねばなりません。この場合にも文全体の中心となる主語は、その前に他の部分との関係を示す前置詞や所謂接続詞のif や whenなどは取らないと云ふ形式に着目して、中心部の主語・述語と付属部分の主語・述語とを区別せねばなりません。これも文の形式から推定する他なく、辞書は教へて

くれません。

実際に教室で使ってみて、この助けはかなり威力がある。日本語を母語とする人にとって英文の構造を把握するために、このことが重要であるとすれば、ネイティブ・スピーカーの統語解析においても、主語と述語が重要性を持つことを示しているのではないか。この観点から今までになされた英語の統語解析の対象例をいくつか捉えなおしてみよう。

2.1 これから示す典型的な袋小路文は、ネイティブ・スピーカーの統語解析においてもよく取り上げられ、ネイティブ・スピーカーにとっても困難を呈するものである。このような文の解析は、無意識的な、自然な解析過程では理解は不可能である。袋小路文の解析がなぜ困難か解明できれば、自然な解析の過程が明らかになる。その困難を説明するために様々な提案がなされている。

以下これらの困難が、様々な理由で主語+述語をうまく捉えられなくて生じることを示そう。

- (2) a. The horse raced past the barn fell.
- b. The boat floated on the water sank.
- c. The dealer sold forgeries complained.

今述べたような「主語+述語を見付けよ」という原理のもとづけば、このような袋小路文は主語と動詞の取り方を間違えてしまったことになる。-ed形を過去形と取るか、過去分詞と取るかの問題になる。これを過去の動詞と取るとその前の名詞は主語ということになり、主語と述語の関係が狂ってしまうことになる。実際は動詞の過去分詞であって述語となれないのである。

この問題は、明らかに語形から過去分詞であることが分かれば、生じない。これは、以下の英文から明らかである。

- (3) The books written by Soseki interest a lot of people.

これらのタイプの文は Frazier & Fodor (1978) は、「最小結合 (minimal

attachment)」の方略で説明する。要素を結合する時は、より接点の数が少ない単純な構造を設定する方を選択する。動詞と考えるほうが、構造がより単純になるので、過去分詞を動詞と捉える。そのような構造の問題なのだろうか。これは接点の数を数えるという構造の問題なのではなく、語の連鎖のみを対象にすればよいのではないか。もっと表層的に単純に、統語解析においては、最初に出てきた動詞の候補を優先するということなのではないか。これは知覚の方略である「NP…V…NP は、文の主語、動詞、目的語と解釈せよ」と関係するであろう。できるだけ早く動詞を取り込むほうが選択されるのだと思われる。それゆえ(2)の場合は、間違ってしまうのである。

「主語と述語を見付けよ」という学習者に対する指針は、統語解析的に言い直せば、「主語を見付け、それを出来るだけ早くその動詞に結びつけよ」になるであろう。語の連鎖が視野に入ってくる順に処理をするのであるから、時間的継起に従うことになる。

2.2 つぎの例も動詞の捉え方にまごつく原因がある。

(4) a. The old train the young.

b. The cotton clothing is made of comes from Mississippi.

(4a)は、trainを名詞であると見なして、文の動詞を見失ってしまう例である。これはThe oldという連鎖が次に名詞を予測してしまうために、trainを名詞と見なしてしまうのである。(4b)は、The cotton clothingをNPと、isをVと捉えてしまう例である。clothing(主語)をis(述語)と結びつけ、The cotton clothing is made of(主語)をcomes(述語)に結び付けなければならない。なぜそうなるのか。意味的にも統語的にもcottonとclothingを結びつけてしまうのが自然である。「木綿」と「衣服」であるから、まことに深い関係にある。また名詞が名詞を修飾する連鎖であり、ごく頻度の高い連鎖であり普通に起こることである。このように実際には、意味やコンテクストが重要な役割を果たす。それゆえThe cotton clothingを主語に、isを述語に見なすのは極めて自然である。

以上の例において、共通にみられることは、「新しく入力された要素を現在処理中の構造の一部として処理せよ」という「遅い閉鎖(late closure)」という方略である。ここではもっと単純に「拒否する理由がないかぎり、新しく入力された語を現在処理中の語の連鎖に結びつけよ」と、ただ語の連鎖だけを対象とする原則に置き換えることにする。統語解析は、基本的に語の連鎖の処理と思うからである。もちろんこれについては、たくさんの例にあたる必要があるが、一つの仮説として提案する。

2.3 次の例においても、やはり主語+述語の取りかたにその原因がある。主節の主語を見失ってしまう例である。

(5) a. After John drank the water proved to be poisoned.

b. Since Jay always jogs a mile seems like a very short distance to him.

John drank the water や John always jogs a mile のようにひと塊にみなしてしまうのは、どのように説明したらよいのであろうか。これは可能な限り、今まで構築した連鎖に出てきた要素を連結することを優先することを示す。つまり「遅い閉鎖」の原則によって説明できる。

以上のことから判断すると、主語+述語が、一見ネイティブ・スピーカーに関係していないように見えるが、実は見えないうところで深く作用していることを示す。彼らにとっては主語と述語がどれかということは今挙げたような例以外では問題になることが少ないためにあまり注目されないのだと思われる。彼らには、多くの場合、たやすくできるためその重要性が見過ごされているのだと思う。しかし一旦何らかの原因で主語を見つけそれを述語に結びつけることが困難になると、ネイティブ・スピーカーにとっても袋小路文になるのである。

2.4 さらに他の例を考察してみよう。Pritchett(1988)がシータ付加(θ -attachment)と呼ぶ処理原則で扱う文についても同じように処理ができる。

(6) a. Without her contributions we failed.

b. Without her contributions failed to come in.

Without her contribution を前置詞句と捉えると(6a)の場合は、weが主語で問題は無い。しかし(6b)の場合には主語を見失うことになり、Without herのみを前置詞句と再解析をする必要がある。それゆえガーデン・パスが生じるのである。

Without her contribution の連鎖が与えられたら、まるごと前置詞句にとるのだろうか、それとも Without her を前置詞句にとるだろうか。問題なく前者であろう。これは her の次に名詞がある場合、それと結びつける方が「遅い閉鎖」の原則に合い、同時に her と名詞の間に区切りがあると考えより頻度が大きいからだと思われる。前の例と共通点がある。頻度が言語の使用において重要性を持つ事は、もっと注意すべきことであると思う(cf. Chipere(2003))。

3.1 Hawkins(2004)は、言語使用がしやすいように言語構造になっていると主張する。もし英語の使用において主語と述語が重要であるとしたら、このことは、英語の言語構造に反映されているはずである。実は、英語において出来るだけ主語と動詞をすぐ捉え、結びつけることができるように構造になっているのである。主語が長いと述語を見つけることが困難になるが、それと対照的に主語が短ければわかり易い。たとえば、代名詞のみが主語を形成している文は極めて簡単である。これは次の文(7a)と(7b)を比較してみれば明白である。

(7) a. *He considers it more dangerous than any horse he had ever ridden.*

b. *That tough brave little old fellow Wells had had prophetic visions after all.*

Biber et al.(1999: 623)によれば、実際にコーパスにあたってみると関係代名詞節は主語にはめったにしか生じない (Head nouns of relative

clauses rarely occur in subject position in the matrix clause (only 10-15% of the time across registers.)。いくつか具体例を挙げてみる。

(8) a. The opposition Civic Forum, which rejected the communist-dominated cabinet unveiled by Mr Adamec at the weekend, is demanding a more representative government staffed mainly by experts.

b. However, the abstract relationships between Subject and Landmark which it [=of] expresses appear seldom to be even hazily based on any mental image of a spatial relationship.

その理由を Biber et al. は関係代名詞節は主節を分断して、聞き手や読み手は関係代名詞節を処理してから主節の動詞にたどり着かなければならないからとしている。(…relative clauses with subject heads disrupt the matrix…hearers/readers must process the relative clause before reaching the main verb of the matrix clause.) これは複数の文を同時に処理することが困難であることと関係すると思われる。一つ目の主語を処理していて、その述語に結びつかないうちに、次の主語が出てくる。これは同時に主語+述語という観点から二つの文を処理することになる。英語という言語は主語が出てきたら、それを述語とすぐに結び付けてできるだけ早く主語+述語を処理したい言語ではないか。

3.2 実は既に述べたように、英語という言語はこの種のタイプの文を処理しやすくするための手段をもっているのである。これは Hawkins(2004)の主張することと一致する。さまざまな外置化がそうである。それによって主語と述語をすぐ見付けることができるし、その処理を同時に2つしないで1つつ出来ることになる。

例えば、Sを文末に移動する外置化によって主部を短くする。

(9) a. It had been clear for some time *that the demands of the arms control process would increasingly dominate military planning.*

b. It is horrible *that he put up with Claire's nagging.*

名詞句からの外置化。

(10) a. A rumour spread through the camp *that a relieving force from Dinapur have been cut to pieces on the way to Krishnapur.*

b. The time was coming *for me to leave Frisco* or I would go crazy.

c. In this chapter a description will be given *of the food assistance programs that address the needs of the family.*

関係代名詞節の外置化。

(11) Toward the close of the Old English period an event occurred *which had a greater effect on the English language than any other in the course of its history.*

外置化すれば主語と述語はすぐ結び付けられるし、一度に一組の主語＋述語を扱えばよいのである。これらは全て主語＋述語の処理をしやすくするためのものであると見なすことができる。一方Hawkins(2004)はこの外置化について、どのくらいの語数で直接構成要素 (Immediate Constituent) を視野に入れることができるかという観点から考察している。ここで提案している原則と一部重なる部分とそうでない部分がある。

3.3 これに対して、主語ではなく目的語に関係代名詞節がつく場合には、少しも困難を生じない。これは、なぜか。一つの文を処理した後、次の文が出現するからである。常に主語＋動詞を一つ処理すればよい。

(12) John owned a cat /that killed a rat /that ate cheese /that was rotten.

実際にどんどん伸びていく例があることから解るように困難は感じられないであろう。

(13) This is the farmer sowing the corn,
that kept the cock that crowed in the morn,

that waked the priest all shaven and shorn,
that married the man all tattered and torn,
that kissed the maiden all forlorn,
that milked the cow with the crumpled horn,
that tossed the dog,
that worried the cat,
that killed the rat,
that ate the malt,
that lay in the house that Jack built.

4.1 特に3つ以上の文を同時に解析することが困難であることは、Kimball (1973)の原則4 (Two Sentences)によって述べられている。それは、「同時に解析可能な文の数の上限は2である(The constituents of no more than two sentences can be parsed at the same time.)」であり、この原理により、Kimballは次の「自己埋め込み文」の理解が困難であることを説明する。

(14) a. [The boy slept].

b. [The boy [the girl kissed] slept].

c. [The boy [the girl [the man saw] kissed] slept].

(14a)は1つのSしかなく問題は生じない。(14b)では、最上位のSから下方にむかって解析と進めると、最上位のSの解析が終わらないうち、二番目のSの解析を始める必要がでてくる。しかし上限は2なので問題は生じない。それに対して(14c)では、3つのSを同時に解析しなくてはならず理解がすぐできない。

ではその解析とは、具体的にはどういうことなのだろうか。ここで展開している論に従えば、それは主語を見付け、それを述語に結び付けていく作業ではないだろうか。その時の困難と関係するのではないのか。(14a)では、主語The boyはすぐsleptと結びつけることができる。(14b)ではThe boy

を slept と結び付ける操作が終らないうちに the girl を kissed に結び付ける操作をしなくてはいけない。(14c)では2組の結びつける処理がまだ終了しないうちに新しく3つ目の主語と述語を結合する処理をしなければならないのである。このように同時に主語・述語関係を処理しなければならない。

4.2 ここで脱線をして日本語の「中央埋め込み文」に触れてみる。郡司・坂本(1999: 179-183)によると、Mazuka et al.(1989)は、日本語について、中央埋め込み文の処理が困難であるか調べるために実験をした。次のタイプについて読み時間を調べた。

(15) 中央埋め込み文・深度1

- a. 浩が[正夫が[e]買った]パンを食べた。
- b. 宏美が[祐子が風邪をひいた]ので見舞いにいった。

(16) 中央埋め込み文・深度2

- a. 山口が[妻が[父親が[e]残した株]を売って[e]作った]金で家を建てた。
- b. 明が[俊子が[犖が泣き出した]とき起き出した]のに気付いた。

(17) 単文

赤ん坊がほ乳瓶でミルクを飲んだ。

(18) 左埋め込み文・深度1

弘子が朝早く起きたときコーヒーを入れた。

掛かる時間を計ってみると、中央埋め込み文(深度2) → 中央埋め込み文(深度1) → 左埋め込み文(深度1) → 単文の順である。これが示すように、日本語においても中央埋め込み文は処理が困難である。

このことについて郡司・坂本(1999)は次のように考察する。英語の中央埋め込み文の処理の困難さを引き起こす原因として、従来3つが考えられてきたと Mazuka et al.(1989)はいう。

- a. 3つの主語の連続が A, B, and C のような名詞句の並列と間違っ
て積されるから。
- b. 人間の文処理能力は、一度に扱えるのが7語程度で、この限度を超

えているから

- c. 最初の名詞句をすぐに文全体の意味構造に組み込むことができないから。

日本語も同時に説明できる原理はこのうちのどれであろうか。郡司・坂本によれば、cが一番説明力がある。これは「人間は文の意味的な表示をできるだけ速く構築しようとする」という即時性の原則(immediacy principle)の主張に基くものとする。

これは次のように捉えなおすことができないだろうか。主語・述語の処理がスムーズにできないために、困難が生じるのではないか。左埋め込み文(18)では、「弘子が」はすぐに「起きた」という動詞に結びつくことが出来て、読み時間はあまりかからない。それに対して、(15)では「浩が」の動詞を処理しないうちに、主語の「正夫が」の動詞を処理しなければならない。さらに(16)では3つの主語を同時に処理する必要がある。これは主語・述語を処理せよという原則を同時に3度適用することである。このように日本語も英語と同じように主語をできるだけ早く述語に結びつけるという観点から説明できる。

4.3 このことは、次の野田(2000)の言葉とうまく適合する。それによれば、「日本語では、長くて複雑な構造をもった成分を、文の前の方に置こうとする傾向がある。」(19a)より(19b)の方が自然である。

- (19) a. [佐々木が[去年の夏キャンプで作った]パエリアの作り方を知りたがっているみたいだ]。
b. [[去年の夏キャンプで作った]パエリアの作り方を佐々木が知りたがっているみたいだ]。

その理由を次のように述べる。「長く複雑な構造をもった成分を文の前の方に出すというのは、文全体の述語成分と直接関係する成分を述語成分の近くに集め、そうでない従属節内部の成分などを遠くに追い出すということである。日本語では述語成分が文末に置かれるので、長く複雑な成分は前に出さ

れることになる。」ただし、日本語の場合は、述語は文の最後にあるので、それに結び付けられるのは主語だけではなく他の要素すべてである。一方英語では述語が出現するまでに限れば、それに主語だけを結びつけばよい。

5. Frazier and Rayner(1988)は、左枝分れそのものが言語処理に対して障害を引き起こすわけではないことを指摘する。なぜなら次の左枝分れを含む(20 a)はなんら困難を引き起こさない。むしろ(20 b)のほうが時間がかかる。

(20) a. When Jane danced, Tim laughed.

b. Tim laughed, when Jane danced.

これは今までの原則でうまく説明できる。同時に二つの文の主語・述語を処理する必要がないからである。Jane dancedひとつを処理して、それが終わったならTim laughedを処理すればよい。ただなぜ(20 b)のほうがなぜ時間がかかるのかすぐに解決策が出てこない。

それに対して次の(21 a)は(21 b)と比べて読む時間が著しく長くなる。

(21) a. That Ronnie won bothered Fritz.

b. It bothered that Ronnie won.

これは既に述べたように、(21 a)では、That 節の述語が出てこないうちに、Ronnie+wonを処理しなければならないからである。

ただ関係代名詞節の外置化の場合は事情が異なる。

(22) a Any girl who takes karate lessons could break the table easily.

b. Any girl could break the table easily who takes karate lessons.

むしろ外置化した(22 b)のほうが時間がかかる。これは、関係代名詞を離れた先行詞に結びつける処理に時間がかかるのだと思われる。しかし主語と述語の観点からは、簡単になる。一度に一組の主語と述語を処理すればよい。

6. もしこのように主語を見付け、それをその述語に結び付けていくことが文処理の方法であるとしたら、それを動詞の後の要素の扱いまで延長すると、具体的にはどのようなのであろうか。主語については、動詞の前のただ

一つの要素であるが、動詞以下の要素については、それほど簡単ではない。動詞の持つ項についての情報を用いて、処理していくことになるだろう。もしこれが正しいとしたら、Ford et al.(1982)のように、述語がどんな文法項をとまうかを示す語彙形式に基づく統語解析やPritchett(1988)のシート付与に似た方式を取るようになるであろう。動詞に後続する部分については、稿を改めて論じてみたい。

7.1 日本語の処理は英語と同じように主語と述語が関係するのであろうか。ここで日本語と英語の差に触れておく必要がある。日本語は場面に依存して主語でも目的語でも表現しないで済みますことが出来る言語である。英語と異なり、三上章の論じるように、主語は目的語などの他の要素と区別されて、文法上特別な地位を持っているわけではない。動詞の前でその単数が複数かによって動詞の語尾変化を決めるような性質を持ってはいない(cf.庵(2003: 43-46))。

また語順が比較的自由である。それでは、どのみち必要な文法関係は何によって示されるのだろうか。これは語順によらず、助詞によって表される。助詞は重要な役割を演じる(伊藤他(1993))。このように日本語と英語の文の構成の仕方は、まったく異なるのである。膠着語対孤立語といえる。

主語は普通、格助詞の「が」によって示されるし、述語は文末にあってすぐに分かる。主語と述語を間違える可能性は少ない。その点では、英語より困難を生じる可能性は少ないように思われる。しかし英語では、大抵主語を述語にすぐ結びつけることができ、動詞が出現した時点で主語と動詞の意味がわかり、動詞の持つ項に関する情報がわかる。

日本語については、動詞が出現する前に主語とか目的語、それ以外の要素の情報が手に入るが、動詞の意味は文の最後に動詞が出現するまでわからない。しばらく待たなければならない。英語では、重要な意味情報が前にくるが日本語では後にくる。山中(1998: 216)によれば、英語においては、文構造においてもパラグラフにおいても重要部を前に置く。これは前者が後者に

において投影されているのではないかと述べる。それに対して、日本語では逆になる。また宮下(1982)も、「英語の文では、日本語と逆に、先に結論を述べて、後に必要に応じて説明をベタベタとくっ付けます。所謂関係代名詞も〈it.....that.....〉構文も〈it.....to.....〉構文もこの展開の仕方に従っています。日本語と英語の基本的な違いを充分に分らせた上で英語の個々の知識を教へ込むことが大切だと思ひます。」と説明している。

7.2 Mazuka(1998: 31)は、そのような日本語の構造が文処理において、どのような影響を持つかを論じる。

In English, the subcategorization frames associated with an individual verb are known to play a critical role in sentence processing.... In an HF language such as Japanese, the subcategorization information does not become available until the verb is reached at the end of a clause. Consequently, the role that such information can play in processing the arguments of a verb during online processing is limited. In some cases, however, the presence of a specific argument can eliminate a set of verbs as potential heads of clause.

ただ動詞によって文構成が決定される点は、英語とまったく同じである。仁田(2002: 28-29)によれば、「動詞には、自らの表す動作や動きを実現・完成するために、必要とする名詞の数や種類や意味的なタイプが、基本的に決まっている。・・・動詞「読む」は、読むという動作を実現するために、動作の仕手という意味を担う名詞と動作の対象という意味を担う名詞の二つを最低限必要とする。仕手を意味する名詞は通常「名詞+ガ」で表示され、対象を表す名詞は「名詞+ヲ」で表示される。また読むという動作の仕手を表す名詞は主に〈人間〉という意味特徴を持つ名詞であり・・・対象になる名

詞は、「書物」「表情」「世界の動向」等々で、読まれる内容のあるものでもラベルを貼れそうな名詞である。」

それゆえ逆に考えれば、文の途中でどんな動詞が最後にくるのかは、ある程度予想がつく。郡司・坂本(1999: 143-146)は、次のような実験をした。

(23) 奈緒美が健に東京へ行くことを_____

(23)では、最後の動詞の部分が抜けている。補って文を完成させるという実験をすると、そうたかさんの動詞が補えるわけではない。基本的に2種類の動詞である。

主語指向動詞: 白状する、自慢する、打ち明ける、告白する

目的語指向動詞: 命令する、頼む、勧める、強制する

格助詞の組合せのパターン (例えば、「が・に・を」とか、「が・を」など)によって文末にどのような動詞がくるか予想できる。

しかしながら、明らかに英語の方が文の先端のほうで情報の量が多く獲得できる言語である。それに対して日本語の方は動詞の意味は最後になるまで完全には解らないし、予想していた通りに必ずしもなるわけではない。

英語のような主要部前置(head initial)型の言語では、文構造を決定するための情報が比較的早い段階で出現する。例えば、hit a ballという動詞句の主要部(head)であるhitは、その補部である目的語のa ballよりも先に出てくる。そこで、他動詞が出てきたら、つぎには目的語が出てくるという予測が可能となる。ところが日本語のような主要部後置(head final)型の言語では、決定的な情報が後から出てくるために、そうした予測が正しいとは限らない。例えば「水が」という名詞句が出てきたら、この名詞句を主語とする動詞(「流れる」など)が後に出てくるかと言えば、必ずしもそうではない。「飲みたい」という述語が続いて現れた場合には、「水が」は主語ではなく、目的語ということになる。

(坂本(1998: 17))

次の引用文も同じ主旨のことを述べている。

日本語における大きな問題は、一つの文において、どのような意味役割を持つ、どのような要素が必要であるかという情報を担う動詞が最後の最後まで出現しないことである。最後の動詞部分によって、・・・それぞれの要素はまったく違った役割を果たし、その内部構造もまったく異なる。(中井・上田(2004: 211))

まとめると、予想はかなりできるが、完全に当たるわけではないと言える。

7.3 上に述べた日本語の性質は、統語解析にどのような影響を持つのであろうか。小川(2006)で明らかにしたように、日本語では節が短くなる傾向がある。そして短い節がたくさん集まって長い文を構成する。いくつか例をあげよう。

(24) a. 読者は、この男と共に、[人のいない]路を歩き、/[人気のない]家を眺め、/風鈴の音や小鳥の鳴き声に耳をすませ、/そして、ゆったりと畳に寝そべっている、/その贅沢を味わう。

(清水正『つげ義春を読む』)

b. ただ今の競技について説明いたします。行司軍配は貴乃花のすくい投げ有利と見て、/挙げましたが、/[同体ではないか]との物言いが付き、/競技の結果、[曙の手の着くの]が早く、/軍配どおり貴乃花の勝ちと見ます。—1997年3月23日、春場所千秋楽、貴乃花一曙戦
(玉村(2002))

c. [いつ頃から車に冷暖房の装置が付いたのか]は/調べて見なければ/解らないが/冷房が戦後であるのは/確かなことのように/暖房の方は戦前からあっても/その装置がしてあるのは/役所などの大きな車に限られていた。
(吉田健一『東京の昔』)

d. [群馬の山村に生まれ、/東京で苦学して/電気専門学校を出、/戦争

に行き、/肺結核の大手術を受け、/ふるさとの生家の下の家に婿に入った]あなたは、[電気技師として勤めていた]鉦山が閉山になるとともに/東京に行きましたね。 (南木佳士『天地有情』)

このようにひとつひとつの節が短くなるのは、なぜなのだろうか。ここでは、文理解の処理をよりスムーズにするためにそうなっていると主張したい。

7.4 このことと関連して、アメリカの独立宣言の福沢諭吉の訳についての柳父(1983)の観察を取り上げる。(a)が原文、(b)が福沢の訳である。

(25) a. When in the course of human events it becomes necessary [for one people to dissolve the political bands [which have connected them with another], and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station [to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them]], a decent respect to the opinions of mankind requires [that they should declare the causes [which impel them to the separation]].

b. 人生已むを得ざるの時運にて、[一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てるの]時に至ては、[其建国する]所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

この訳について柳父は次のように述べる(下線は筆者)。

文全体は、いくつかの句に切れ、はじめの一句を除いて、他はみな、[離れ]、[同列し]、[至ては]、「述べ」、「得ず」と、動詞、または動詞プラス付属語で終わっている。読者は、動詞が現れたところで、だいたいな意味を語る言葉が分り、思考の流れはひと区切りつく。ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて、その先へ読み進んで行ける。

思考の流れはひと区切りつくという直観はとても重要である。これは私の

直観にとっても一致する。節は言語処理において基本単位である。このように考えると、1つの節ごとに言語処理がなされ、終ると違う段階にそれは移され、当面の処理の対象外になる。これは「ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて」と一致する。動詞が現れたところでその文の解釈はひとまず完成する。これは次のことと符号する。

(26) Kimballの原則7(処理の原則)句が閉鎖されると、句レベルよりも高次の統語的(ひょっとすると、意味的)処理の段階に押しやられ、句の内部に関する解析結果は短期記憶から削除される。(大津(1989: 342)による和訳)

この句の代わりに節とすると、柳父の直観と適合する。言い換えると、動詞に行き着くまでは宙ぶらりんである。主語と述語を見付けることは英語と異なり、日本語においては、たやすく出来て問題は生じない。もし問題があるとすれば、この2者を結びつけることがすぐにはできないことである。ただすでに述べたように、英語と異なり、主語は、他の要素に対して文法的に特別な地位を占めているわけではない。多分すべての要素をできるだけ早く述語に結び付けることが要請されることになるであろう。

つまり述語が出現するまで、決定を遅延しなければならない。どのくらいまで待てるかという問題が生じる。一時的記憶として利用できる作業記憶(working memory)の容量の問題になる。それをできるだけ抑えようということになるであろう。その結果、節をできるだけ短くしようということになる。

その観点から福沢訳を見てみよう。動詞を四角で囲み、それに掛かる要素を下線部で示す。

(27) 人生已むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てるの時に至るは、其建国する所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

動詞に掛かる要素はとても短いことがわかる。

小笠原(2002: 197-201)はよい文をかくための3原則を述べている。それでも文をできるだけ短くすることを勧めている。

よい文の三原則 短文・単文にせよ

修飾語を多用しない

主語・述語関係を明確に

「これは要するに一文を短く書けということである。」ではどうすれば短くできるか。それは単文にすることである。「単文というのは「～は、～である」というのが一つしかない文である。」「短文・単文は書いている方はブツブツ切れる感じでよくないように思える。だが、読む方にしてみれば、すっきりしてわかりやすい。試しに身近にある文章から探して読んでみると、わかりやすく親しみやすい文章は、たいてい短い。」「結局のところ最も肝心なのは、「短文・単文を書く」ということに尽きる。」

以上の例が示すように、日本語では節が短いと、とても理解しやすくなる。

8. 本論では、英語と日本語ではどちらも主語と述語は文処理において、重要であるが、述語の位置の違いと、日本語における英語とは異なる主語の性質により、異なった影響力を持つことを論じた。日本語が動詞が最後に来るSOV言語であり、英語がSVO言語であることは、言語処理において大きな差が生じる要因である。

その他の種類の主語と述語が関与しない袋小路文については、他の機会に調べてみたい。

参考文献

阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五(1994)『人間の情報処理 言語理解の認知科学』サイエンス社.

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999)

- Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Chipere, Ngoni (2003) *Understanding Complex Sentences: Native Speaker Variation in Syntactic Competence*, Palgrave Macmillan.
- Ford, Marilyn, Joan Bresnan, and Ronald M. Kaplan (1982) "A Competence-Based Theory of Syntactic Closure", Joan W. Bresnan (ed.) *The Mental Representation of Grammatical Relations*, 727-796, MIT Press.
- Frazier, Lyn and Janet Dean Fodor (1978) "The Sausage Machine: A New Two-Stage Parsing Model", *Cognition* 6, 291-325.
- Frazier, Lyn and Keith Rayner (1988) "Parameterizing the Language Processing System: Left- vs. Right-Branching within and across Languages", J. A. Hawkins (ed.) *Explaining Language Universals*, 247-279, Blackwell.
- 郡司隆男・坂本 勉 (1999) 『言語学の方法』現代言語学入門 1、岩波書店.
- Hawkins, John A. (2004) *Efficiency and Complexity in Grammars*, Oxford University Press.
- 伊藤武彦・田原俊司・朴 媛淑 (1993) 『文の理解にはたす助詞の働き』風間書房.
- 庵 功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門—日本語学の父 三上章—』くろしお出版.
- Kimball, John (1973) "Seven Principles of Surface Structure Parsing in Natural Language," *Cognition* 2(1), 15-47.
- Mazuka, R., Itoh, K., Kiritani, S., Niwa, S., Ikejiri K. & Naitoh, K.(1989) "Processing of Japanese Garden Path, Center-Embedded, and Multiply-Left-Embedded Sentences: Reading Time Data from an Eye Movement Study", *Annual Bulletin, Research Institute of Logopedics and Phoniatics* 23, 187-212.
- Mazuka, R.(1998) *The Development of Language Processing Strategies—*

A Cross-Linguistic Study Between Japanese and English,
Lawrence Erlbaum Associates.

- 宮下真二 (1982) 「学生達はどこで落ちこぼされたか」『翻訳の世界』1月号。
宮下 (1985) に所収。
- 宮下真二 (1985) 『英語はどういう言語か』季節社。
- 中井 悟・上田雅信編 (2004) 『生成文法を学ぶ人のために』世界思想社。
- Nakayama Mineharu (1999) "Sentence Processing", Tsujimura Natsuko
(ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 398-424, Blackwell.
- 野田尚史 (2000) 「語順を決める要素」『言語』9月号、22-27。
- 小笠原喜康 (2002) 『大学生のためのレポート・論文術』講談社学術新書。
- 小川 明 (2004) 「統語解析についての試論——英語学習者の出会う困難」
『東京家政大学研究紀要』第44集(1)、191-201。
- 小川 明 (2005) 「英語と日本語の名詞句の長さの比較——なぜ英語の関係
代名詞節は日本語に直訳すると不自然になるのか」『英語英文学研究』
(東京家政大学英語英文学会) 第11号、43-63。
- 小川 明 (2006) 「日本語と英語における節の結合方式の差——どのよう
に文は長くなっていくのか」『東京家政大学研究紀要』第46集(1)、187-195。
- 大津由紀雄 (1989) 「心理言語学」柴谷方良・大津由紀雄・津田 葵『英語
学の関連分野』英語学大系第6巻、181-361、大修館書店。
- Pritchett, B. L. (1988) "Garden Path Phenomena and the Grammatical
Basis of Language Processing", *Language* 64, 539-576.
- 坂本 勉 (1995) 「統語解析」大津由紀雄編『認知心理学3 言語』145-158、
東京大学出版会。
- 坂本 勉 (1998) 「人間の言語情報処理」大津由紀雄他『言語科学と関連領
域』言語の科学11, 1-55, 岩波書店。
- 田子内健介 (2005) 「統語解析」中島平三編『言語の事典』144-158、朝倉書店。
- 玉村文郎編 (2002) 『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社。
- 山中桂一 (1998) 『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大

学出版会.

柳父 章 (1995) 『比較日本語論』 日本翻訳家養成センター.